【議事】定 4

⑵ 第 31 回日 ESA 行政官会合の開催結果について

文科省の坂口企画官が資料 4-2（行政官会合）を説明し、そこに出席した板谷審議官が所感を述べた後、質疑応答があった。

板谷：会合は堅苦しい名称が付いているが、ざっくばらんなもので、オープニングリマークスを用意していたが、いきなりプレゼンを促されるなど、和気藹々とした和やかな演出であった。次のステップを、更に内容を充実させていくことが良いと思っている。国際的な宇宙開発が色々の形で行われ、国際協力の輪が出来上がってきているので、今後のことを考えるのに最適な場であると感じた。私は初めての出席であるが、お互い初めて顔を合わせて、堅苦しい型どおりの発表を行うのでなく、柔軟な進行を行い、良い雰囲気であった。

青江：ESA の方から、「部品の標準化、相互認証のためのワーキンググループ作ろう。」との提案があったが、これに対し日本側は「検討することとした。」と、書かれているが、それこそ日本側から働きかけるという展開が普通[1]ではないか。それが、「検討する」といって持ち帰らなければならないのか。

「国際的な協力については ISS の教訓を踏まえた枠組みの構築が重要である」と書いてある。これは表現が綺麗であるが、実際何を話したのか。もう少し丁寧にお話頂けると有り難い。

JAXA 梶井：最初の質問は JAXA からお答えする。部品の標準化については既に密接に取り組みが行われており、毎月電話会議、会合を持って進めている。今回は ESA の議長が状況を報告したものであり、JAXA 側は参加していなかった。また、今回の提案は、部品ばかりでなく、基準についても進めたいとの提案が追加されていたので、持ち帰ることにし、通常活動の中で取り組もうと考えている。

青江：たまたま若干の行き違いがあったに過ぎないと思う。部品の標準化、相互ミッション[2]は大変重要であり、今日、開催された、輸送系の WG でもシリアスな問題として受け止めている。そして、どうにか手を打たなければいかんという重要な問題で、それを根本的に解決する手段とは思えないが、かなり対応できるので、担当にしっかり受け止めさせ、上手く進めて貰いたい。

文科省 坂口：探査については、プログラム・オブ・プログラムスで纏まるように協力しようと日本側が提案し、ESA もそういう考えが重要であると言った。

青江：「ご尤もだ」と言うことで合意したのか。アメリカから少々何を言われようが、スタンスを狂わさずにやろうと合意したのか。

板谷：ESA の各国と日本とが合意したと言うわけではない。ESA の代表と日本の代表が意見を交わし、このような意見交換をしながら取り組もうとの合意はした。

---

[1] 「普通」と言われると、議論が先に進まない。日・欧の宇宙用部品の共通化は、どんな戦略に基づいて「推進すべき」と決断できるのか。「宇宙用部品の輸入先が米国だけではわが国宇宙活動の自立性が確保できず、日・欧の相互協力を確保することで相互従属性を保って、自立の程度を相対的に高める。」ことは考えられる。このことを頭の中にしまったまま、「普通」と決め付けてしまうと、プロジェクトを具体的に進める人たちは、思考停止に陥ってしまう。

[2] 宇宙科学 WG での議論であって、輸送系 WG の議論ではない。

池上：(参考) 2. 分科会 (7) にソフトウェアに関する記載がある。具体的にはどんなことで進んでいるのか。

板谷：今まで、宇宙技術・安全保障の一環として扱い、特出しはしていなかったが、ソフトウェアはこれからの重要事項との認識で、前々から幅広く協力しており、この席で情報交換するとともに、3ヶ月程度の人材交流をしようということである。大きな課題としては宇宙用の Java 仮想マシンという、オンボードソフトウェアの開発のやり方について、具体的に共同作業をやろうと言うこと人待っている。

池上：で、これから人を送ろうというのか。

板谷：すでにもう１サイクル、来るのと送るのを行っている[3]。

池上：あと、もう一件、最近日本で議論されている、有人飛行について議論はあったのか。

JAXA 梶井：有人フライトとは、有人宇宙輸送系のようなことですか。

池上：例えば、月に行きましょう等々の話を含めまして。

JAXA 梶井：それは探査計画の中での議論の一環と思っている。今回の会合の中では、(3) の宇宙ステーションの分科会の中で、宇宙探査についてのそれぞれの活動状況を紹介しあって、情報交換が行われた。余り、有人フライトに焦点を当てた大きな議論は無かった。それは別の流れでマルチで進めているから、此処で大きく扱う必要が無かったという関係もあった。

松尾：「会合のあり方について更なる改善」と書かれているが、これはどんな意味なのか。「更なる」は良く使われる言葉で、今はまあ良いのだけれどというニュアンスがあるのでしょうが。

文科省 坂口：個別の分科会で個別に議論するのではなく、全体会合で ESA 日本間の様々な協力について、全体を俯瞰しながら、戦略的な議論をしたい[4]と云うことである。例えば、分科会を全体会合の後でやるのではなく、分科会の報告を受けてさらに全体会議で議論するほうが、戦略的な議論ができるのではないかと言う話をした。

板谷：冒頭の全体会合のときも、異例な形で、各分科会の会長全員に一言ずつ会合で議論する課題について発表して貰った。本来なら、プレナリーセッションと言うのは、双方が総合的なことを言い合っただけでおしまいになるのを、さらに分科会会長まで発言させることで、より、中身が深まりつつある[5]、謂わば、上辺だけの話ではなくなっていると云うこと。

---

[3] 行政官会合の報告全体が、既に着手しているものを「今後の課題」として計上しているように見える。

[4] 一見ご尤もであるが、実はおかしい。最後に全体会合（クロージングセッション）が計画されているので、此処で議論すれば良い。最初に、今回の会合での大きな方針を宣言することは重要である。

[5] それぞれの分科会の中での重要課題が発表される代わりに、分科会同士の優先順位が見えなくなる。「深まった」と評価するのは早計ではないか。外交はバランスが大切であり、貢献と享受が釣り合わなければならない。各分科会の中でバランスしきれないものを、全体としてバランスさせるのが全体会合ではないのか。